

いいんだヨ、これで

風間杜夫

壁際に長身の男が所在なさげにフラ―と寄りかかっている。永六輔さんかなと思うが、そんなはずはない。もう何年も前に亡くなっているのだから。

そういえば、永六輔さんは本当にたくさんの芝居を観ていた。私が今までに観にいった芝居でも、気がつけば永さんの姿が近くにあった。

私に小言を言ってくれる人がまた一人減ってしまった。

客電が落ちて、劇場が暗くなりはじめた。

舞台に薄く照明が入った。夕暮れなのである。全体がうすぼんやりしている。先ほどの男は、もうそこにいなかった。

舞台には、私が昔の昔に住んでいたような安アパートが建っている。物語は昭和の終わり、私たちが青春を送った頃のような設定になっているらしい。

不思議なのは、その安アパートの真上に、上から下へ大きな歩道橋がかかっていることだ。橋にも街灯が弱くまたたいている。

歩道橋の上から初老の男がゆっくり中央に歩いてくる。照明はまだ上がりきっていないが、深く帽子をかぶった男が誰か、もうその歩き方だけで私にはわかっていた。

男は中央あたりで止まった。決して中央ではない。シンを少しはずしている。

手すりに両手をつけて、腰を伸ばすようなそぶりをして顔を上げた。自分の思い通りに生きられなかった屈折した初老の男の正体が浮かぶ。

風間杜夫である。

「知仁」。芸名でない奴やつの本名が唇から漏れて、苦く甘い液が口腔こうくわうに広がった。

風間の芝居を観るのは、何十年ぶりだろうか。

四七年前、私たちは今日の舞台のような安アパートで暮らしていた。

知仁とは、同じ大手劇団の養成所の同期であったが、小沢昭一などが所属していたその劇団が揉めて、私たちは首を切られた。

劇団員でもない私たちは文句も言えず、よけいにいきりたった。養成所に納めた金を取り戻して、勝手に劇団を作った。

「ドイツ表現主義にのっとり、我々の劇団の名を『表現劇場』とします」

一緒に劇団を作った、今も続いているコントグループ、シティボーイズのメンバーのきたろうが私にはよくわからないことを言って、劇団事務所のアパートを祐天寺の駅近くに借りた。

その安アパートに、私と風間、そしてもう一人のメンバー、斉木しげるが転がりこんでくる。

風間が実家から米をかつぱらってきて、炊いたご飯にマヨネーズ、少しの醤油しやうゆをたらし

て、三人で食った。うまかった。

まるで、貧乏の固まりのような生活であった。家賃をためたら、大家が腹いせに風呂のフタを全部持って行ってしまった。それだけのせいではないが、風呂が沸くのに、三時間もかかった。ガス漏れもしていたのだ。

舞台のセットがグルリとまわって、シーンはカラオケのある小さなバーに変わる。ミラーボールがまわり、風間がバーのママ役的女とカラオケを始めた。家族にもアイソをつかされた男の唯一のはげ口なのであろうか。

どのくらいの時間がたったか

昔、祐天寺の安アパートで、知仁は、ギター片手によく歌った。

ザ・カーナビーツのたぶん、あれは『好きさ 好きさ 好きさ』という曲だったと思う。

最後のサビで絶叫するのだが、風間はその時、かならず、私を指差すのであった。差された私は勘弁してくれヨとばかり、両手をオーバーに広げて、みんなの笑いを誘った。

風間が、あの曲を歌うのではないかと、私は客席の隅でドキドキした。

指を差されたら、どうする。また、昔のように、立ち上がって、大げさにアクションを返すのだろうか。

しかし、その歌ではなかった。

再び、舞台はまわって、元の暗い安アパートになり、風間の長い台詞せりふが続いている。風間は良い役者だ。長い台詞を難なくこなすのはもちろんだが、黙っている時、なお魅力的だ。良い役者は黙っている時に、その片鱗へんりんをみせる。あざとい動作は客に見透かされる。風間はそれをしない。

今、風間とは、昔の時間を取り戻すようによく会っているし、麻雀マージャンも楽しい。先日は焼肉を食べた。風間の奴、七〇にもなってキムチにマヨネーズをかけていた。私は思わず吹き出してしまった。

風間が、私たちの劇団をやめ、つかこうへいさんに誘われてから、ずいぶん長い間、付き合いが遠ざかっていた。私には、そんなこだわりはなかったのだが、一人、売れてゆく

風間に、気安く声はかけられなかった。

後になってわかるのだが、風間も「いつまでも、昔の仲間との付き合いなどやめろ」と誰かにさとされたらしい。

その後の活躍は目覚ましかった。出演したつか作品の映画『蒲田行進曲』は大ヒットし、風間や平田満は世間に顔を売った。

その頃、私たちは、もうシテイボーイズを結成して、地方のキャバレーやら、ビルの屋上にある、ビアガーデンの仕事で、その日を暮らしていた。

風間の『蒲田行進曲』を三人で観た記憶がある。

たぶん、すごく面白かったのだろう。私たちは打ちのめされて、一言も口をきかずに映画館を後にした。

たまたま仕事帰りだったので、私たちのバッグには、小道具が詰まって重かった。

斉木のバッグには、大きなマネ板とチョコレートパフェのグラス。

きたろうのそれには、使い終わって余った大根やらニンジン、それに野菜クズ。

私のバッグには、料理用の危険なほど大きい、本物の包丁が入っていた（その日仕事で使ったフェンシングの剣もはみ出していた）。

あれからのくらしいの時間がたったのだろう。今回芝居を観に来たのは、ある仕事ができっかけであった。

私の元に、本の朗読をしてほしいという仕事の依頼があった。

それが、伊集院静さんのエッセイ（『大人の流儀』）で、デジタル配信になるという。

荷は重かったが、その会社の担当の女性にとっても熱心に口説かれ、また、私の功名心も手伝って、その仕事を受けた。実は風間も同じ会社の仕事で、『ハリー・ポッター』全巻をたった一人で朗読することになったらしい。

その会社の取り計らいもあって、一席設けられ、風間からの誘いもあって、この客席にいる。